

学位請求論文の内容の要旨

領域	看護学領域	分野	
氏名	木村 千代子		
(論文題目)	生命の危機的状況にある高齢者の代理意思決定に関する研究		
主査	藤田 あけみ		
副査	大津 美香		
副査	大庭 輝		
副査	木立 るり子		
<p>【研究背景】 日本の 2020 年度の高齢化率は 28.8%であり、今後も特に後期高齢者の割合が増えていくと予測されているなかで、救急医療現場では、救急搬送される人のうち高齢者が 60.0% (2020 年) を占め、治療方針の決定において本人の意思確認が難しいため、多くは家族が代理意思決定者となる現状がある。</p> <p>代理意思決定をめぐる先行研究では、家族側の影響要因として、家族の思い (篠原ら 2011、鈴木ら 2008)、家族の関係性 (佐々木 2004) などがあげられているほか、医療者側では提案内容 (加藤ら 2015) による影響も指摘されている。また、決定したことへの罪悪感など、心理的後遺症 (Wendler, and Rid, 2011) を引き起こすことを前提とした配慮が求められるようになってきている。高齢者が搬送者である場合には特に、本人の事前意思を尊重すべきこと (比田井 2012) や、延命治療の帰結に対する家族の理解を確認すべきこと (櫻庭ら 2015)、家族やかかりつけ医の意向 (金子 2011) も併せて調整しておくなどの対策の必要性が指摘されている。このような治療の選択を行う家族の負担を軽減するために、代理意思決定を支える看護は重要であると考えられる。</p> <p>本研究は、家族の代理意思決定を支える看護を明確化するために、2段階の研究から導いた。研究Iでは、救急搬送者の年齢を問わず、「生命の危機的状況において治療の選択を行った家族の意思決定」に関する概念を、Rodgers の概念分析アプローチを用いて明らかにした。研究IIでは、高齢者が救急搬送された経験を持つ家族の語りから、内容分析の手法を用いてカテゴリー化し、研究 1 の結果とあわせて高齢者の場合の代理意思決定の特徴を検討した。</p> <p>【研究I：生命の危機的状況にある人の治療の選択を行った家族の概念分析】</p> <p>1.目的：「生命の危機的状況において治療の選択を行った家族の意思決定」の構成概念及び補足概念を明らかにする。</p> <p>2.方法：1)対象文献の選定：(1)医学中央雑誌 (Web版Ver.5) およびCiNii Articlesを用いて「決定」と「看護」をタイトルに含み「救急」「クリティカルケア」「高齢者」「家族」「救急搬送」「家族看護」の検索語を組み合わせると検出した計16件の和文献、(2) Pub Medを用いて、“Emergency” “Surrogate decision making” “Critical care” “Decision</p>			

(注) 論文題目が外国語の場合は、和訳を付すこと。

making” “Family” “Nursing”のキーワードを組み合わせて検出した計13件の英語文献、合計29件を対象論文とした。なお対象文献は、家族が行った治療の選択における意思決定について記述されている定性的研究とした。同様に、意思決定に影響を与えると考え、同じ文献から補足概念として医療者の支援を抽出した。

2) 分析方法：Rodgersの概念分析アプローチを用いて分析した。Rodgersの概念分析は時間や状況に伴う概念の変化に着目し、概念を構成する要素を抽出するものである。対象文献29件のすべてのサブカテゴリーを分析データとし、意思決定に先立って生じる先行要件、意思決定を構成する属性、意思決定後に生じる帰結の概念枠に分析データをコードとして付置した後、類似性と差異性を照合しながらカテゴリー化した。

3. 結果：家族の治療の選択について210コードは、5属性、3先行要件、3帰結が抽出され、生命の危機的状況において治療の選択を行った家族の構成概念図を下線の上に、医療者の支援265コードは、1先行要件、1属性、1帰結を補足概念として下線の下に、Figure 1.に示す。

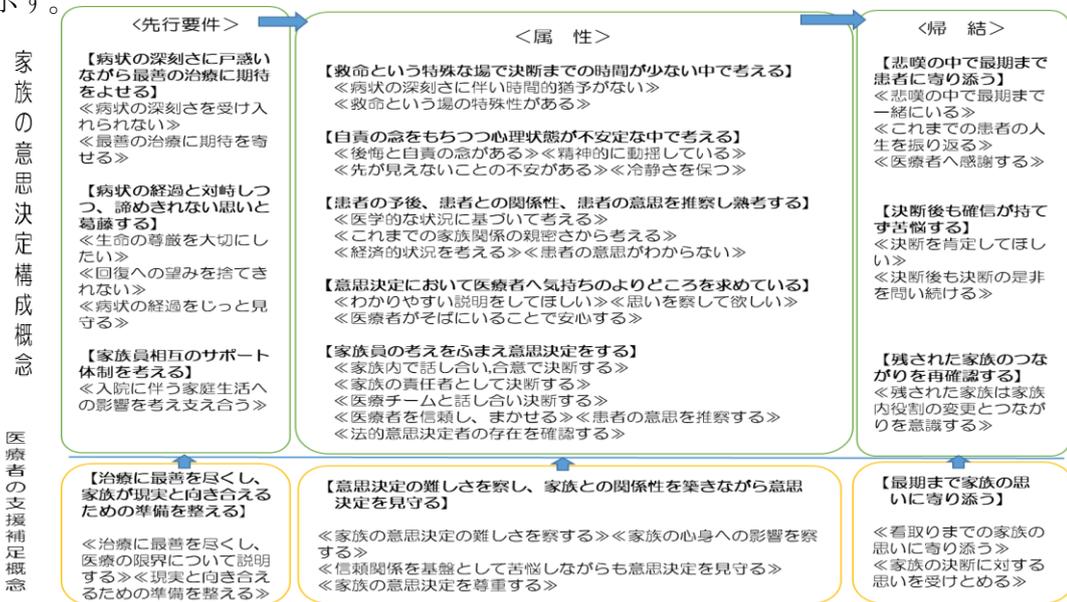


Figure 1.生命の危機的状況において治療の選択を行った家族の意思決定の構成概念および医療者の支援の補足概念

4.考察：生命の危機的状況にある人の家族の意思決定は、救命という特殊な場で、決断までの時間が限られ、不安定な心理状態の中で、患者の予後、患者の関係性、患者の意思を推察し熟考する。意思決定において医療者へ気持ちのよりどころを求めながら、家族員の考えをふまえて意思決定をする過程であった。突然の生命の危機的状況に、家族も心理的危機状態に陥る。意思決定後も家族は苦悩しており、心理的影響が大きいことが示唆された。補足的に導いた意思決定を支える医療者の支援は、家族の心身への影響や思いをくみ取るなど関係性を築きながら意思決定を見守り支援していた。

【研究II：高齢者が救急搬送される場合の特徴】

1.目的：高齢者が搬送された際の家族の代理意思決定の特徴を研究Iで抽出された高齢者に特定しない概念との違いから明確にする。**2.方法：****1) 対象者：**予期せず生命の危機状況になり、救急搬送され高齢者の治療の選択を行った家族 10 名。**2) 研究方法：**半構造化面接を行った。**3) 分析方法：**内容分析にて、得られたデータを最小意味単位に区切りコードとし、コードの類似性と差異性を照合しながらカテゴリー化した。

4) 倫理的配慮：対象者に対して十分な説明と同意を得て実施した。また弘前大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認を得てから実施した。(整理番号2017-039)

【細則様式第 1 - 2 号続き】

3.結果: 研究協力者 10 名の平均年齢は 57.2 歳、搬送された高齢者の平均年齢は 80.6 歳、高血圧、糖尿病、心筋梗塞などの既往があった。搬送後の転帰は、死亡 6 名、退院または療養中が 4 名であった。

救急搬送から治療を受けるまでを示す先行要件に該当する 489 コード、4 先行要件、意思決定の構成要素を示す属性に該当するコード 370、4 属性に、意思決定後を示す帰結に該当するコード 388、4 帰結にカテゴリー化された。研究Ⅱで抽出された高齢者の家族の意思決定の属性のカテゴリーを Table 1. に示す。

新たなカテゴリーとして、先行要件では、【異変を察知し、死の不安を感じながら対応する】、帰結においては、高齢者の転帰による語りの違いがみられた。生命の危機的状況から回復した場合の、【これからも療養生活を支える】が新たなカテゴリーだった。

Table 1. 研究Ⅰで抽出された構成概念と研究Ⅱのカテゴリーの比較（属性）

研究Ⅰ: 生命の危機的状況にある人の家族の意思決定	研究Ⅱ: 生命の危機的状況にある高齢者の家族の意思決定
【救命という特殊な場で、決断までの時間が少ない中で考える】 ≪病状の深刻さに伴い時間的猶予がない≫ ≪救命救急という場の特殊性がある≫	
【自責の念を持ちつつ心理状態が不安定な中で考える】 ≪精神的に動揺している≫ ≪後悔と自責の念がある≫ ≪先が見えないことへの不安がある≫ ≪冷静さを保つ≫	【心理状態が不安定な中で考える】 ≪精神的に動揺している≫ ≪大きな不安と自責の念がある≫
【患者の予後、患者との関係性、患者の意思を推察し熟考する】 ≪患者の意思がわからない≫ ≪これまでの家族関係の親密さから考える≫ ≪医学的な状況に基づいて考える≫ ≪経済的状況を考える≫	【患者の予後、患者との関係性、患者の意思を推察し熟考する】 ≪基礎疾患の治療を受けている≫ ≪80、90という年齢から考える≫ ≪患者の態度から事前意思を推察する≫ ≪患者の意思がわからない≫ ≪これまでの家族関係の親密さから考える≫
【意思決定において医療者へ気持ちのよりどころを求めている】 ≪わかりやすい説明をして欲しい≫ ≪医療者がそばにいることで安心する≫ ≪思いを察してほしい≫	【意思決定において医療者へ気持ちのよりどころを求めている】 ≪わかりやすい説明をして欲しい≫ ≪医療者がそばにいることで安心する≫
【家族員の考えをふまえて意思決定をする】 ≪患者の意思を推察する≫ ≪家族内で話し合い、合意で決断する≫ ≪家族の責任者として決断する≫ ≪医療者を信頼しませる≫ ≪医療チームと話し合い決断する≫ ≪法的意思決定者の存在の確認をする≫	【家族員の考えをふまえて意思決定をする】 ≪患者の事前の意思を推察する≫ ≪家族内の話し合いで合意する≫ ≪家族の責任者として決断する≫ ≪医療者を信頼しませる≫

注：下線：研究で抽出されたカテゴリーと同じもの、太字：研究Ⅱで抽出された新たなサブカテゴリー

4.考察: 救急搬送から治療を受けるまでを示す先行要件では、救急搬送に至るまでの高齢者の状況は、変化がわかりにくく急速に悪化するというような、高齢者の急性期の特徴と合致していた。治療の選択に影響する要因として、基礎疾患の進行的悪化や、一般的に長寿を認識させる年齢であること、日頃の高齢者の言動に事前意思の手がかりを探ることなどが、高齢者の場合の特徴であった。意思決定後の帰結において、今後も療養を支えるというカテゴリーは、生命の危機から回復できた場合であり、回復後の介護の重度化と長期化を想定して、迷いつつも決めたことへの責任をうかがえた。しかし新たなカテゴリーではないが、高齢者の家族は、意思決定において医療者へよりどころを求めており、意思決定の難しさがうかがえた。

【まとめ】研究Ⅰでは、生命の危機的状況にある患者の家族の意思決定の構成概念、補足概念を抽出した。研究Ⅱでは、救急搬送された高齢者の家族へのインタビューから代理意思決定の特徴を明らかにした。代理意思決定においては、単に、治療で命が助かる可能性があるなら救命を求めるということでなく、本人と家族にとっての救命の先を見据えたうえでの駆け引き（折り合い）が行われる。日本においては、事前意思が浸透しているとはいえないことから高齢者世代の家族の特徴をふまえた支援が望まれる。今後、医療、介護、在宅ケアにおいて、ACP が浸透していくことで考え方の変化が予測されると考えられることから、研究の継続が必要である。

【細則様式第 1 - 2 号続き】

学位論文のもととなる研究成果としての筆頭著者原著

論文題目	A Concept Analysis of Decision-Making by Families in Critical Life Situations
著者名	Chiyoko Kimura Ruriko Kidachi
掲載学術誌名	Open Journal of Nursing
巻, 号, 項	9, 1123-1137
掲載年月日	2019年 11月 28日